

MELDIA

FREE

VOL.68

JUL.2025

タレント
セイン・カミュ
インタビュー

Thane Camus
Interview

「つながる力が、
社会を変える」

——ヨコハマプロジェクトと
“本人”たちの一日

「こもれび」のように、
やさしく照らす

——働く喜びを育てる現場を作る

姿勢から育てる「聞く力」

——目を合わせることから始まる
コミュニケーション

障がい者アートを通じて伝えたい、違う「力」
障がいを特別にしさない、
まっすぐなまなざし





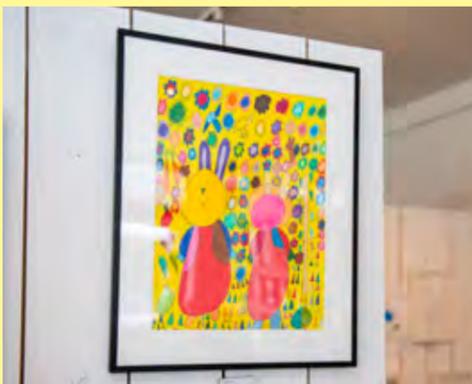
タレント
セイン・カミュ
インタビュー
Thane Camus
Interview

※嬉々!! CREATIVEと
企業のコラボTシャツ

障がいを特別にしない、 まっすぐなまなざし

～障がい者アートを通じて伝えたい、“違い”の力～

タレント・ナレーターとして活動しながら、アートと福祉の現場にも積極的に関わるセイン・カミュさん。
知的障がいのある妹との関わりを通じて見えてきたこと、そして家族へのメッセージを伺いました。



カラフルな色使いが素敵なジャスティーンさんの作品。
© 嬉々!! CREATIVE GALLERY & CAFE

「妹の行動には、僕らにはない視点や感覚がある。驚かされることも多いし、僕
「両親が共働きだったこともあり、僕は
7歳上の兄として、子どもの頃から妹の
送り迎えや入浴の手伝いをしてしまし
た」。家族としての日々の関わりの中
は、妹さんに対し、単なるサポート役で
ある以上の気づきや学びがあったとい
います。

障がいのある人を特別視ではなく、
対等な一人の人間として

CONTENTS

VOL. 68

MELDIA
2025 JUL.

- 03 **障がいを特別にしない、
まっすぐなまなざし**
～障がい者アートを通じて伝えたい、“違い”の力～
- 07 **陸上で整った生活、育まれた社会性
～“走る”ことがくれた自信と笑顔～**
- 10 **姿勢から育てる「聞く力」**
——目を合わせることから始まるコミュニケーション
- 12 **“こもれば、のように、やさしく照らす”**
——働く喜びを育てる現場を作る
- 14 **「つながる力が、社会を変える」**
——ヨコハマプロジェクトと“本人”たちの一日
- 16 **“隠さない”開放的なレストランで
誇りとやりがいを持って働く、
おんぶらーじゅの福祉のかたち**
- 18 **手仕事に誇りを込めて**
——「equalto」で広がるものづくりの可能性
- 20 感情を整える、やさしいひととき
空港から広がるカームダウン・クールダウンスペース
- 22 **おさんぽ DE 楽しむ!**
～絶品朝食から始まる、江ノ電を活用した鎌倉・藤沢エリア散策～
- 24 「気持ちの良いルーティン」は今の自分から将来の自分へのプレゼント
水越けいこ M Size はじまり Again
- 26 **シンママまると息子の成長日記 VOL.5**
- 28 セサミストリークの絵本がスタート！ VOL.2
みんなステキ！ 1、2、3!
- 31 **プレゼント**





取材日もアトリエで絵を描いていたジャスティーンさん。撮影場所 © 嬉々!! CREATIVE GALLERY & CAFE



し役としての役割も果たしています。
嬉々!! CREATIVEアーティストとして活動する妹について
妹の絵にある自由の感性と、アートに宿るエネルギー
ジャスティーンさんの作品には、既成概念にとられない自由さと、見る人を惹きつける力があります。彼女は、与えられたモチーフを自分なりに解釈して

描きます。たとえば、複数の写真から好きな構図を選び、それを基に独特な色使いで再構成するのが彼女のスタイル。「青い顔に赤い耳の犬、どこがビートル?と突っ込みたくなるような絵。でもそれがいい。見た瞬間に彼女らしさが伝わってくるんです」。

作品の多くには、英語や日本語で一言メッセージが添えられており、それも魅力のひとつ。「ここにあるのは春の花たち。私はひまわりが好き(原文英語)とメッセージがある絵には、どこにもひまわりなんて描いていない。でも、彼女の中で感じている、たのしさ、そのまますべて作品に出ているんです。だから見ている元気をもらえる。技術のうまさじゃなく、伝える力があるんです。自由さが彼女の個性であり、魅力なんです。僕はそれがすごく好きですね」。

妹さんとの関わりの中では、ときに「これは甘えかも?」と感じる場面もあったそうです。「できない」と言いながら、実際はやりたくないだけということもあって、あるときは本気で叱ったこともあると振り返ります。「障がいがある」と伝えたその一件は、家族としての関係性に緊張感を与えるも

比べないという選択肢と、家族に伝えたいこと



嬉々!! CREATIVE の商品のマグカップ・チョコレートを持つ二人。@嬉々!! CREATIVE GALLERY & CAFE

のでもありましたが、それ以降、妹さんは自分でやれることにはきちんと向き合うようになったといいます。「人間だから疲れたり、面倒に思う日もある。それは障がいの有無に関係ない。だからこそ、できること・できないことを一緒に見極めながら、ちゃんと対等に接することが大切なんです」。



のほうで学んでいると思うくらい」と語るセイインさん。
「正直、思春期にはなんで自分だけと感じたこともありました。友達と放課後に遊べたらなとか、どうしてこんな気持ちになるんだろうとか」。

人を特別な存在や、守るべき存在としてではなく、対等な一人の人間として接したいと思うようになったんです。そんな思いが芽生えてから、彼のまなざしは変わっていききました。
現在、妹のジャスティーンさんは、神奈川県平塚市の福祉施設「嬉々!! CREATIVE」でアーティストとして活動しており、その作品は多くの人の心を掴んでいます。

パラリンアートの出会いについて
お涙ちようだい、ではない、アートの力とビジネスの視点

妹の才能をもっと多くの人に知ってほしい——そんな思いから、セイインさんは障がい者アートを支援する団体「パラリンアート」に理事として関わるようになります。

きっかけは偶然でした。番組取材で再会したパラリンアートの会長・松永昭弘さんが「障がいのある人の描いた作品をビジネスとして広げたい」と語り、見せてくれた作品



の中に、妹さんの絵が3枚含まれていたのです。「2000点の中から選ばれていた。まさに運命的な再会でした」と語ります。

パラリンアートの活動は幅広く、障がいのあるアーティストの作品を使った企業とのコラボレーションや、レンタルアート事業の推進、横浜・赤レンガ倉庫での「ともいきアートフェスティバル」など多岐に渡ります。「障がい者を支援する対象に留めるのではなく、社会の一員として、経済的にも自立できる環境づくりが重要」とセイインさん。アートと社会やビジネスが繋がることで、作家としての誇りが芽生えるだけでなく、周囲の見る目も変わってくるといいます。「自分の作品が誰かに届くこと、その価値を本人が感じられるってすごく大きいことだと思います」。

では、妹さんの作品が2つ選ばれ、素敵な服になりました。
パラリンアートでは、障がいのある方がアートを通じて収入を得て、納税者としても社会参加できることを目指しています。「親が亡くなった後、この子はどうなるのか」と不安を抱える家族にとっても、自立の手段として希望を与えられる活動です。セイインさん自身は、理事という立場だけでなく、タレントとしてのネットワークを生かして人と人をつなぐ、橋渡



セイインさんの妹・池田ジャスティーンさん。撮影場所 © 嬉々!! CREATIVE GALLERY & CAFE



パラリンピック3大会出場 陸上・山本萌恵子選手インタビュー

陸上で整った生活、 育まれたた社会性

走る「こと」がくれた自信と笑顔

自閉症があり、言葉を発するのに時間がかかる山本萌恵子さん。そんな彼女が陸上に出会い、自信と社会性を身につけていきました。陸上では国際大会でメダルも獲得。就労しながら趣味も楽しむ現在に至るまで、お母様と歩んだ軌跡をたどります。



「走ることで生活が整ったんです」とお母様は振り返ります。

山本萌恵子さんが陸上を始めたのは中学1年の時。きっかけは、療育の先生の勧めで始めた朝のランニングでした。小学校2年生で場面緘黙になり、自閉症の診断を受けた萌恵子さんにとって、毎朝3kmのランニングは心と体を整える習慣になっていきました。

中学校に入ってから陸上部に所属。最初は短距離からスタートしましたが、徐々に中・長距離に移行していきました。「タイムが出ると嬉しい」と本人も語るように、記録が見えることで努力の結果が実感できることが励みになっていきました。

「陸上を始めてから、生活のリズムが整い、社会性も身に付くようになったんです。朝のランニングも最初は2時間かかりました。けれど、3km走りきると、やりきることが大切と療育の先生からも熱心にアドバイスを受け、それを毎日続けていたら3ヶ月で生活が変わりました。何をやるにも私がそばにいる状態だった萌恵子さんが、人と一緒に練習したり、指導を受けたりする中で、自立への一歩が踏み出せたと思います」とお母様。今では週6日の練習をこなし、全国・世界

身の中でできることを見つけて、伸ばしていくことが、本人の幸せにもつながるといいます。

最後に、障がいのある子どもと向き合う家族に向けて、セインさんはこう語ります。

「普通ってなんでしょ？誰もが何かしらの課題を抱えている。だから、健常者も、障がい者も、本当は線なんてないはず。家族という存在であることも選ばれたからこそ、出会えたんです。絶望じゃなく、希望としてとらえて。大切なのは、比べないこと。うちの子はうちの子。人と違っていい。なんとかやる、どうにかなるさって、構えていればいいんです」。



計3名様 PRESENT

A 嬉々!! CREATIVE ドリップコーヒー & コーヒーゼリーセット 2名様

B 嬉々!! CREATIVE クリアファイル & ポストカードセット 1名様

詳しくはP.31

セイン・カミュさん

タレント・ナレーターとして活躍する一方、障がい者アート支援団体「パラリンアート」で理事も務め、アートを通じた共生社会の実現に力を注いでいる。

パラリンアート

一般社団法人障がい者自立推進機構が運営。障がい者のアートを社会に広めることで、就労や収入の機会を創出する団体。作品のライセンス提供や企業コラボを通じて、アートによる共生社会の実現を目指している。

<https://paralymart.or.jp/association/>

(キキ・クリエイティブ)

ジャスティーンさんが所属する嬉々!! CREATIVEさんのギャラリーを取材場所としてお借りしました!

1階では、障がいのある方々が作る作品のギャラリー兼カフェとしても楽しめます♪



嬉々!! CREATIVE GALLERYでしか観られない唯一無二のアート! 約2か月ごとに趣向を凝らした作品展を開催しています。



日本初のフェアトレード事業を開始した「第3世界ショップ」さんとのコラボも。



嬉々!! CREATIVEのカフェで働くアーティストの皆さん。



代表 北澤桃子さん

ボーダレスなアート&エンターテインメント集団「嬉々!! CREATIVE」代表(ジョイン・クリエイティブマネジメント株式会社代表取締役)アートディレクター・企画プロデューサーとして障がいのある人のアート活動普及に2003年より従事。「だれもが嬉々!!」として、創造的に働く! 女性の幸せ・子供の幸せを守る、ミッションに活動中。

嬉々!!

kiki CREATIVE

ボーダレスなアーティスト集団であり、障がいのある人が活躍するあらゆるクリエイティブ活動を行う嬉々!! CREATIVE。誰もがその人の得意なことを活かし嬉々として創造的に暮らせる社会を目指して2022年4月、神奈川県平塚市にオープンしました。

kiki!! CREATIVE is a Japanese atelier that supports the creative activities of people with disabilities.

<https://www.kikicreative.jp/>



の舞台へと挑戦を続けています。

イップスと向き合いながら、
走る喜びを取り戻すまで

中学時代、萌恵子さんは短距離から1500mなどの中長距離種目へと移っていきました。練習を積み重ねる中で才能が開花し、2016年のリオ、東京、そしてパリのパラリンピックなど、数々の国際大会で日本代表として活躍してきました。

一方で、順風満帆な日々ばかりではありませんでした。昨年は思うように走れ



現在はハーフやフルマラソンにも挑戦中。



ない期間が続く、イップスのような状態に陥ったこともあります。原因が分からず、苦しい日々が続いたといいます。印象深い大会を聞くと、この時期に走った「パリパラリンピック」と答える萌恵子さん。

「彼女は決して諦めなかった。他の選手の方がゴールし終えている中でなんとか走り切りました。その時は日本に居ましたが、同行していた萌恵子の兄が、『会場の方々が萌恵子を応援してくれている』と教えてくれました。コーチや応援してくださる方の存在が支えになっていました」とお母様。

そんな中、挑戦した初めてのフルマラソン「名古屋ウィメンズマラソン2025」で、T20クラス(パラ陸上)の日本記録を8分更新するという快挙を達成。「3時間6分15秒」で走りきったその記録は、自信を大きく後押しする出来事となりました。

初マラソンを走り終えた後の表情を

「世界一を目指している」「フルマラソン

言葉にならない思いを、
走ることで伝えたい

今回の取材では、萌恵子さんは一言一言、時間をかけて、まっすぐに答えてくれました。



見て、「ようやく萌恵子が笑顔になった」と涙したお母様。「走っている時の萌恵子の顔が、本当に楽しそうだったんです」。そう語るお母様の言葉に、走ることに彼女にとっての「自分らしさ」であることがにじみます。

長距離のレースでは、「最後までイーブンで走れたことが自信になった」と本人も頷きます。

「練習と日々の積み重ね
できることを少しずつ増やす」

現在、萌恵子さんは千葉にいるコーチから毎日遠隔で指導を受け、月に1度は直接の指導も受けています。日々の練習内容や体調の記録を送り、それをもとにトレーニングメニューを組んでもらっています。練習には低酸素環境下でワットバイクを使った持久力トレーニングなども取り入れられており、コンディション管理も丁寧に行われています。

「体重は気にせず、ちゃんと食事を摂っ



趣味の一つのクロスステッチ。
細かい作業も得意。

「毎日送る練習データをもとに、遠隔で細やかなメニューを作ってもらえるのは本当にありがたいです」とお母様。陸上を中心の生活が、本人にとっても安定の基盤になっていると感じているそうです。

萌恵子さんには好きなこともたくさん

「絶対大丈夫、諦めない」という気持ちを大事にしてきました。誰かと比べる必要はない。本人の中にある「好き」や「得意」を大切に育てていってあげてほしいです」と、お母様は語ります。「大変な時期は、本当に将来がどうなるんだろう」と思っていました。けれど、諦めないで進んできて、そして彼女が前を向いて走り続けてきたから、ここまで来られました。親は、信じて見守るしかありません。

現在、10月の大会や、次の挑戦に向けて日々トレーニングを続けています。



に専念するか、1500mでパラリンピックを目指して頑張るか、今は悩んでいる。そんな言葉には、今の自分と、これからの未来に向き合う決意が感じられます。

「絶対に大丈夫、諦めない」という気持ちを大事にしてきました。誰かと比べる必要はない。本人の中にある「好き」や「得意」を大切に育てていってあげてほしいです」と、お母様は語ります。「大変な時期は、本当に将来がどうなるんだろう」と思っていました。けれど、諦めないで進んできて、そして彼女が前を向いて走り続けてきたから、ここまで来られました。親は、信じて見守るしかありません。



やまもと もえこ
山本 萌恵子さん

愛知県岡崎市出身。自閉症の療育の一環で陸上を始め、3大会連続パラリンピックに出場。現在は岡崎市内の高校で就労しながら競技を継続し、2025年3月には初挑戦のフルマラソンで知的障がい者クラスの日本新記録を樹立。趣味はクロスステッチや名古屋グランパスエイトのユース試合観戦。

姿勢から育てる「聞く力」

目を合わせることから始まる コミュニケーション

脳性まひの診療を専門に、多くの知的障がいの子とも向き合ってきた真野英寿先生。
「姿勢」「視線」といった日常の動作を通じて、
コミュニケーションの改善に繋がっていく——
その実感と、家族へのエールを伺いました。



真野 英寿先生

医学博士、昭和大学江東豊洲病院リハビリテーション科診療科長・准教授。日本リハビリテーション医学会専門医・指導医。脳性まひやダウン症、知的障がいを中心に、小児の姿勢・運動発達に関する診療と研究に取り組んでいる。

脳性まひから広がった リハビリ診療の視点

脳性まひや知的障がいなどのリハビリ診療を専門とする真野先生は、長年にわたり、さまざまな子どもとその家族や、特別支援学校などの先生方と向き合ってきました。専門分野は脳性まひですが、実際に診ているのはそれに限らず、知的障がいやダウン症などの子どもたちも多く、発達に関する全般的な相談が寄せられています。

「脳性まひの治療では、姿勢がすべての基本です。バランスが崩れたままでは、筋肉も動かせませんし、呼吸や食事にも影響が出ます」。この視点は、知的障がいのある子どもにも共通すると言います。

知的な障がいがあると、「どうせわからないだろう」と本人に語りかけることをあきらめてしまうケースも少なくありません。しかし、真野先生は言います。

「どんな障がいがあっても、目を合わせよう。まっすぐ立って、呼びかけるといふ日常の積み重ねで、脳は確実に変わっていきます」。

目の使い方、姿勢、呼吸—— 生活の中にある改善のヒント

真野先生が大切にしているのは、「日



子どもたちは、これから開発できる 力をたくさん持っている

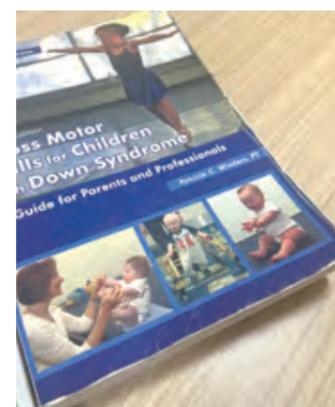
「どんな子どもでも、できることはあります」。真野先生は、多くの診療経験を通じてそう確信するようになったと言います。

「そしてもうひとつ大事なことは、目を合わせることを話をするときに、目を止める。それだけで、相手に集中して話を聞く力が養われていきます」。これが、将来的に集団の中でも学ぶことにつながるべく、真野先生は語りかけます。「小学校に入る前には、危ないときには止まるなど、一人でどこかに行ってしまう

日常生活の中で、どれだけ正しい動きを繰り返すか」ということです。

たとえば、知的障がいのある子どもが目を合わせづらい理由のひとつに、目の使い方の発達の偏りがあります。「目の追いかけ方がうまくいかない」「顔を近づけると視線がずれる」といった現象は、視線のコントロールに関わる小脳の働きが関係していると考えられます。小脳は姿勢や運動の調整を担うだけでなく、目の動きにも深く関わっており、これを鍛えていくことで焦点を合わせることができるようになります。

「目を合わせるといふ動作を、少しずつ、何度も繰り返していくうちに、反応は確実に変わってきます。また、腹筋と背筋をぐっと抑え、腹圧をかけることで姿勢も安定します。腹圧をかけることは排便にもいいです」と真野先生は語りかけます。



表紙の写真を見て驚いたと語る翻訳元の著書

わなないようにリスクを教えることが必要になります」。そのために、姿勢と視線、そして危険を伝える言葉の感覚を、小さなうちから積み重ねることが重要だと言います。「できたときには、うんと褒めてあげる。ハグでもいい。ダメなときはダメと伝える。そういう基本のやりとりが、信頼関係をつくります」。

学校選びにおいても、「普通級か支援級か」という選択についてよく話すという真野先生。まずは、目を合わせて、話を聞く力があるかどうか、その第一歩になると語りかけます。

「子どもたちは、これからも開発できる力をたくさん持っている。年齢に関係なく、リハビリはいつでもできる。家族も、一緒に歩んでいけることを忘れないでほしいです」。

1名様 PRESENT

監訳・真野英寿『マリアンヌ先生のダウン症のある子どもたちの手の器用さを育てるガイド 日常生活で楽しく取り入れる活動BOOK 原著第3版』（三輪書店、2024）

詳しくはP.31



安定した姿勢をキープするには、腹筋と背筋をぐっと抑え、腹圧をかけることが大切。



「できた」が自信になる。
コミュニケーションに繋がるリハビリ

リハビリは、年齢に関係なく継続することで意味があります。そして、目を合わせる姿勢を整えた上でコミュニケーションを取ることで話が聞けるようになります。診察の中では、リハビリを毎日続けていたら1か月後に「目が合うようになった」と驚かれることもあるそうです。

「やって見せて、言ってみて、させてみて、できたら褒める」。この流れが、すごく大事なんです」と真野先生は言います。「できる環境を用意して、できたとき

に『すごいね』と認めてあげる。それが子どもの自己肯定感につながります」。『できた』という感覚が増え、子どもは自然と挑戦するようになります。そうになると、教えなくても自分でやってみたり、という意欲が芽生えてくる。それが、真野先生の考える『学びの循環』です。

また、真野先生はアメリカの著書『ウィンダース先生のダウン症のある子どものための身体づくりガイド』（三輪書店、2020）などの翻訳にも携わっており、国内でもこの考え方がもたらがってほしいと話しています。「この本の表紙の写真を見て驚きました。ダウン症の子どもの目の前の大人としっかりと目を合わせているんです」。

「ごもれび」のように、やさしく照らす

働く喜びを育てる現場を作る



季節を感じる花々に囲まれ開かれた場所で、障がいのある人たちが自信と誇りを持って働ける環境をつくる——。代表・国分さんが立ち上げた「komorebi」が目指すのは、「事業所」を超えた福祉の新しいカタチです。

開かれた場所で、一人ひとりの可能性を信じる

神奈川県横浜市鶴見区に拠点を構える就労継続支援B型事業所「komorebi（ごもれび）」は、大通りに看板を構え花々に囲まれた場所にあるこの施設は、15人の利用者と支援スタッフがともに働く花屋を中心とした事業所です。代表を務める国分さんは、証券会社勤務から保育園経営を経て、障がい福祉の世界へと転身した人物。その背景には、自身のお子さんに障がいがあるという経験があります。

「閉ざされた空間で黙々と作業するだけではなく、もっと開かれた職場環境を作りたい」と語る国分さん。利用者が社会の一員として働き、自信と達成感を感じられる場所を目指し、花を中心とした事業所「komorebi」を立ち上げました。



代表の国分雅枝さん。自身の息子さんが就労施設で働く経験から明るく生き生きとした事業所を作りたいとkomorebiを設立した。

「一人ひとりの得意を活かす現場づくり」
「komorebi」では、障がいのある方の個性や特性に合わせて、作業内容を柔軟に設定しています。手先の器用さや集中力に応じて、葉を取る作業からブーケの制作、アレンジメントのラッピングまで、担当する内容はさまざま。難しい作業も、経験を積むことで徐々にできるようになっていきます。

作業の指導は、当初はスタッフがマンツーマンで行っていましたが、現在は先輩利用者が新しいメンバーに教える場面も増えてきたとのこと。「みんなが一つのテーブルを囲んで、自然と教え合うような雰囲気が出ています」と国分さんは話します。

お花のサブスクリプションサービスにも取り組んでおり、定期的に利用者が作るブーケを各地へ届ける仕組みも整えています。「現在は毎週もしくは隔週でお届けするプランがあり、毎度違う花を使って、今日のお花をスタッフで調べ、利用者が名札を添えてお届けしています」。



「障がいのある人たちの事業所、という枠を超え、社会の中で自立できる力を育むプラットフォーム」としてのkomorebiを構えています。

「事業所ではなく、komorebiブランドへ」

国分さんは今、「事業所」という枠を超え、社会の中で自立できる力を育むプラットフォームとしてのkomorebiを構えています。

「障がいのある人たちの事業所、という固定観念を少しずつ変えていきたい。お花を通じて人と人がつながり、利用者たちが『社員』としての意識を持てるような場所にしていきたいんです」。

その想いは、ロゴやエプロンなどの細部にまで表れています。見た目も洗練された環境で、利用者は誇りを持って働くことができます。福祉のイメージを超えた「komorebiブランド」としての確立を目指しているのです。

「外の世界を見れば、可能性はたくさんあります。保育園や地域のイベントなど」

「SPROUT(スプラウト)」の野口さんを定期的に招いて、プロの技術指導を受ける機会も設けています。ブーケやアレンジメントの美しさだけでなく、花の管理方法や花言葉などの知識も習得し、季節や行事に合わせた商品作りが行われています。

また、専門家である近所の花屋「SPROUT(スプラウト)」の野口さんを定期的に招いて、プロの技術指導を受ける機会も設けています。ブーケやアレンジメントの美しさだけでなく、花の管理方法や花言葉などの知識も習得し、季節や行事に合わせた商品作りが行われています。

明るく、思いやりのある職場から生まれるもの

「komorebi」では、明るく穏やかな職場づくりも大切にしています。

職員4名とサービス管理責任者、調理担当の職員が利用者と密に関わりながら、日々の作業や人間関係をサポート。利用者も含め特に重視しているのが「思いやりのある関係性」です。

「誰かが困っていたら自然に声をかけたり、休憩が必要な人には、奥の部屋で休んでおいで」と他の利用者が言っている。そんな優しさの連鎖が自然と生まれていると国分さん。音が苦手な利用者には静かな作業場所を用意し、得意な分野を活かせるよう細やかな配慮がなされています。

また、クリスマスパーティーや遠足などの年間行事も、利用者にとっての大きな楽しみです。ビンゴ大会では欲しい商品に目を輝かせ、遠足では公共交通機関を使うの移動や外出先での食事を楽しむ、普段とは違う交流の時間を大切にしています。



「仲間と笑い合いながら一つの仕事に取り組むことが、利用者の社会性や自己肯定感」



3名様 PRESENT

komorebiボールペン1本 ※種類は選べません 詳しくはP.31



komorebi
就労継続支援B型事業所。花を通じて利用者が誇りと喜びを感じながら働ける環境を提供しています。
横浜市鶴見区下末吉4-27-10
<https://www.komorebi-flower.com>





エンタイムフィッ トネスのブースで「チャリティスクワット」の盛り上げ役として活躍。スクワット終了後は風船を渡すなど、元気いっぱいサポートをしていました。「スクワット、楽しかった」と話し、ダンスが生きがい。障がい者ダンスチーム「ラブジャンクス」に所属し、週1回の練習を続けています。「いつか、ダンスで舞台上に立ちたい」と語ってくれました。



ツナガリウォークでは、障がいのある当事者が出展ブースで運営を手伝う「本人ボランティア」の仕組みがあります。受け手ではなく、担い手として参加することで、本人にとっても自信と経験につながる取り組みです。

スクワットを盛り上げる
元気印！ダンスで夢を追いかける
久保さん(24歳)

竹工作も笑顔でサポート
ものづくりと表現が大好き！
松崎さん(23歳)

グランピングブースで竹工作のサポート役として参加。「作るのが好き」という言葉通り、来場者への声かけや補助を笑顔でこなしていました。普段はクッキーづくりの仕事に携わり、フィギュアスケートやタップダンスも趣味。「いつかは歌にも挑戦したい」と、夢を語ってくれました。



本人が主役！「受ける」から「届ける」へ



「つながる力が、社会を変える」 ——ヨコハマプロジェクトと“本人”たちの一日

障がいのある人とない人が、自然につながる場を目指して。ヨコハマプロジェクトが開催する10周年目のツナガリウォークは、当事者も担い手として関わることのできるイベントです。山下公園の広場が優しさで満ちた1日取材しました。

初のボランティア体験。
演技の夢にも一歩ずつ
福田さん(22歳)



神奈川県立大学のブースで、来場者と一緒に「パタカラダンス」に参加。普段は福祉事業所に通いながらアヴニールプロダクションにも所属。昨年は一般の舞台公演にも出演し実績を重ねており、「滑舌を良くしてもっと挑戦していきたい」と意欲的。初のボランティア体験では「楽しいだけではない」と、活動の意味を噛みしめている様子が印象的でした。

ヨコハマプロジェクト

ふれあう、伝える、学び合うをテーマに事業を展開。横浜を拠点に、障がいのある人もない人も互いを認め合い、ともに力を発揮できる社会づくりを目指し、ウォークイベント等を開催している。
<https://yokohamaproj.org/>



2名様 PRESENT

ツナガリウォーク
オリジナルTシャツ
※男女兼用Sサイズ

詳しくはP.31

ボランティアは5回目のベテラン。今回は神奈川県立大学ブースを担当。来場者のサポートを得意の笑顔で周りを笑わせながら活動されていました。普段は福祉事業所に通所しながら保育園にも勤務。ティズニーが大好きで、将来は「おにぎり屋さんをやってみたい」と話してくれました。



毎度いろんな仕事をボランティアで体験。将来の夢は、おにぎり屋さん！
田代さん(22歳)



ヨコハマプロジェクト代表
近藤 寛子さん
三女に障がいがある。当事者家族として、地域に自然なつながりを生み出す場づくりに取り組む。

「障がいがある人と、ない人が自然に出会える場をつくりたい」、代表の近藤さんが、障がいのあるお子さんを育てるなかで感じた「関わる機会の少なさ」をきっかけに、2014年にヨコハマプロジェクトが設立されました。

代表的なイベント「ツナガリウォーク」は、特定の障がいに限らず、誰もが自然と参加できるような空間を目指しています。現在では神奈川県との共催で数千人規模にまで成長し、冊子「ダウン症のあるくらし」の作成や口腔ケアなど医学的情報を伝えるフォーラムなど、活動の幅を広げています。

近藤さんは「知らない人はいない、ただ出会っていない友達がいるだけ」というアイルランドの詩人の詩がとても好きで大切にしています。無理なく、自然体で続けられる形で、それぞれのペースで関わり合えるようなイベントを目指します」と、数を追わず、一人ひとりの関わりを大切にしたいと語ります。

「まだ出会っていない友達がいるだけ」
——やさしさがめぐる場づくり